

## 授業中での永住組と帰国組の指導方法

本校シャーロット日本語補習学校の場合、企業赴任者の家庭が7～8割、永住者の家庭が2～3割です。永住者の方の割合が少ないということもあり、永住組と帰国組の指導方法を違えて考えるということはしていません。というより、指導方法を分ける必要はないと考えています。

### (1) 補習校としての基本姿勢

永住者の方の中には、日本語に触れる機会を多くさせるだけでいい、日本語を忘れさせない程度でよいと考えていて、企業赴任の家庭のように、帰国したときに困らないように、日本の学校と同じような教育内容を学習するといったところまで望んでいないかもしれません。

各補習校ごと、設立当初からのその学校としての基本姿勢（基本方針）があると思います。本校の場合は「いずれ日本に帰国することを前提に、帰国後日本の学校にスムーズに順応できるようにするために、日本の学校教育を行う」ということです。この基本方針はそれぞれの補習校によって多少違うと思いますが、基本的な考えは同じだと思います。永住している家庭には入学時にこの基本姿勢を説明し、理解していただいています。

### (2) 普通の授業で補える

永住組、帰国組と指導方法を考えなくても、それは普通の授業の中で十分解決できることではないでしょうか。帰国することを前提とした子どもに対する授業といっても、塾のように受験一辺倒の授業をするわけではありません。週1日ということもあり、ほんとの基礎的な事項を中心とした授業を行っているわけです。そういう意味では永住者も十分理解できる授業内容であると思います。

### (3) 授業の工夫

学習活動・学習形態の工夫（教え合い学習、ペア学習、グループ学習）

授業の中で、子どもにとって、ただ机に座って先生が言うことを聞いている授業ほどつまらないものはありません。教師にとって、授業の中でそれぞれの子どもが活動する場面づくりが必要です。隣の子と言い合ったり教えあったり（ペア学習・教え合い学習）、グループで話し合ったりゲームをしたり（グループ学習）などの活動を授業に取り入れると、子供たちは生き生きとしてきます。それどころか、理解が不十分であった子どもが、友だちとの関わりの中でしっかりと理解できるようにもなります。これは永住者・帰国者に限らず、どの子ども達にとっても当てはまることです。日頃より、わかる授業の工夫をしていけば、この問題は解決できると思います。

課題提示の工夫（能力別・習熟度別課題提示）

もしそれでも、というのであれば、『学力差のある子ども達への指導方法』のところでも述べましたが、授業の中で練習問題などを行うとき、能力別・習熟度別に課題提示を行ってみたらどうでしょう。練習問題等を行うとき、「発展コース」と「基礎コース」など2・3種類の段階に分けたプリントを用意して行ってみるのも一つの方法です。